

一、長唄「翁千歳三番叟」

翁 松本幸四郎
千歳 藤間藤太郎
三番叟 松本錦升

各日の序開きを飾る(三番叟)、趣を変えて二日目は長唄です。天下泰平、五穀豊穰をおごそかに祈る演目に重ね合わせて、日本舞踊協会と日本舞踊界の伝統と未来を祝します。

二、地歌「古道成寺」

清姫 吉村輝章
安珍 山村友五郎

上方舞を代表する吉村流家元と山村流宗家の共演が話題。道成寺ものの中でも最古の曲と言われる本曲。ほどいた帯を蛇体に見立てるなど、趣向に富んだ振り付けが見所です。
振付・吉村雄輝

三、常磐津「釣女」

大名 若柳彦三衛門
大船冠者 花柳昌太郎
上臈 藤間 鞠穂
醜女 藤間 秀嘉

大名にならって美女が釣れたと浮かれる太郎冠者。衣をとってみたら獲物はなんと醜女。迫る醜女、逃げ回る太郎冠者のやりとりもにぎやかな、人気の狂言舞踊です。

四、長唄「七騎落」

土肥次郎實平 頼朝の家臣
西川箕乃助 吾妻豊太郎
船長 西川扇二郎 花柳登貴太郎
土肥遠平 藤間 達也
若柳里次朗 松風 光陽
源頼朝 市山松扇 若柳吉應

落ち延びる武士たちを待ち受ける過酷な運命。極限の選択を迫られる實平の、わが子への愛と主君への忠義を壮絶に描きます。文化庁芸術祭賞を受賞した当代西川扇藏振付の傑作です。
作詞・海津勝一郎 作曲・杉浦弘和
振付・西川扇藏

五、清元「喜撰」

喜撰 花柳 基
お梶 水木 佑歌

六歌仙の一人、喜撰法師が飄々と愛嬌のある坊主として登場します。法師が通う相手は祇園の茶汲み女お梶。二人の色事を、粋で軽妙な味わいで見せる洒落を踊ります。

六、創作「にっぽん」

まつりの四季

一、箏曲「月彩」

五條 詠佳 花柳 秀衛
西川 申品 花柳 奈卯女
花柳 和あやぎ 藤 蔭 静寿
花柳 笹公 藤間 藤 椛

月にまつわる様々なイメージを、箏と打楽器による多彩な響きで奏でます。曲に触発された花柳寿南海が広大な宇宙を着想して振り付け、楽曲と舞踊の融合が美しい作品です。
作曲・米川敏子 作詞・高橋明邦
振付・花柳寿南海

二、常磐津 上「駕屋」

駕屋 猿若清三郎
大 堀 越 瑛 貴

江戸の市井に生きる粋な人物を描く常磐津二題。軽妙な面白さが魅力です。
「駕屋」はいなせな駕籠かきが登場。弁当を盗もうとする犬を相手に洒落つ気たつぷりに踊ります。同じく粋な女船頭が主人公の「雷船頭」。こちらは落ちてきた雷を相手に踊るという奇抜な趣向です。

下「雷船頭」

女船頭 藤間 洋子
雷 尾上 菊 透

振付・二代目猿若清方(駕屋)
振付・藤間勘祖(雷船頭)

三、長唄「一人の乱」

安倍宗任 花柳 寿 楽
源頼義 若柳 吉 蔵

反乱を起こした安倍一族とその討伐を命じられた源頼義。敵同士ながらも認め合う二人の武士が最後に辿りつくのは。人間国宝でもあった先代壽楽作品の中でも屈指の名作です。
作詞・海津勝一郎 作曲・七代目杵屋巳太郎
振付・二世花柳壽楽

四、長唄「二人道成寺」

花子 尾上 紫
桜子 市川ぼたん
所化 尾上 菊透 花柳 楽人
五條 珠太郎 藤間 豊彦
西川 一右 藤間 直三
花柳 克昂 藤間 裕太郎
花柳 寿々彦 若見 匠祐助
花柳 近彦 若柳 三十郎

あまたの踊り手を魅了し、あまたの観客に愛される舞踊の最高峰「京鹿子娘道成寺」。
その道成寺を二人で踊る「二人道成寺」。二人ならではの華やかさと豪華さが舞台いっぱいに繰りひろげられます。

五、創作「にっぽん」

まつりの四季